

特異積分作用素について

阪大 基礎工 小泉 澄之

§ 1. 特異積分作用素-(I)

$x = (\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n)$  は  $n$  次元ユークリッド空間の点, または,  $0 = (0, 0, \dots, 0)$  から  $(\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n)$  へのベクトルを,  $|x|$  はその長さ  $(\sum \xi_k^2)^{\frac{1}{2}}$  を表わすものとする.

$k(x)$  は次数  $-n$  の同次函数, すなわち

$$(1.1) \quad k(\lambda x) = \lambda^{-n} k(x), \quad \forall x; \lambda > 0$$

を満たし, さらに, 次の性質

$$(1.2) \quad \int_{\Sigma} k(x) d\sigma = 0; \quad (1.3) \quad \int_{\Sigma} |k(x)|^p d\sigma < \infty$$

が成立しているものとする. ここに,  $p > 1$  で,  $\Sigma$  は単位球:

$|x| = 1$ ,  $d\sigma$  は  $\Sigma$  上の面積要素とする.

$f \in L^r (r > 1)$  ならば

$$(1.4) \quad \tilde{f}_\varepsilon(x) = \int_{|x-y|>\varepsilon} k(x-y) f(y) dy$$

とおくと

$$(1.5) \quad \tilde{f}_\varepsilon(x) \rightarrow \tilde{f}(x), \quad \text{a.e. (pointwise)}$$

$$(1.6) \quad \tilde{f}_\varepsilon(x) \rightarrow \tilde{f}(x), \quad \text{in mean}$$

おおよそ

$$(1.7) \quad \|\tilde{f}\|_r \leq A_{r,p} \left[ \int_{\Sigma} |k(x)|^p d\sigma \right]^{\frac{1}{p}} \cdot \|f\|_r$$

が成立する。この結果は、次の形式の特異積分作用素

$$(1.8) \quad K(f) = \alpha f + \tilde{f}, \quad \alpha \text{ は complex const.}$$

$\alpha$  間における積 (composition) の可能性を保証している。

条件 (1.2) は  $\tilde{f}$  の存在のための必要条件である。それは、 $f(x)$  を  $|x| \leq 1$  の上の特性函数とすれば、

$$k(x) = \Omega(x')/|x|^n, \quad x' = x/|x|$$

だから

$$\begin{aligned} \tilde{f}(x) &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \int_{\varepsilon < |x-y| < 1} k(x-y) dy \\ &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \int_{\varepsilon}^1 \frac{r^{n-1}}{r^n} dr \int_{\Sigma} \Omega(y') d\sigma = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \log \frac{1}{\varepsilon} \int_{\Sigma} \Omega(y') d\sigma \end{aligned}$$

から明白である。

例 1. Hilbert 変換.  $n=1$  のとき,  $k(x) = \Omega(x')/|x|$  2"

(1.2) を満たす  $\Omega(x')$  は  $\text{sign}|x|$  に限る。従って,  $n=1$  のときは

Hilbert 変換が得られる。すなわち

$$(1.9) \quad Hf = \int_{-\infty}^{\infty} \frac{f(y)}{x-y} dy$$

例 2. Riesz 変換.  $n \geq 2$  のとき,  $k(x) = x_k/|x|^{n+1}$  とおくと (1.2) を満足する. このとき

$$(1.10) \quad R_k f = \int \frac{x_k - y_k}{|x-y|^{n+1}} f(y) dy, \quad (k=1, 2, \dots, n)$$

は Riesz 変換と呼ばれる.

(1.1), (1.2) および (1.3) が成立しているとき,  $f^* \in L_2 \subset L$ ,  $k_{\varepsilon, \eta}(x) = k(x)$ ,  $\varepsilon < |x| < \eta$ ;  $= 0$ ,  $|x| < \varepsilon$ ,  $|x| > \eta$ . とおいて,  $\tilde{f}_{\varepsilon, \eta} = K_{\varepsilon, \eta} * f$  の Fourier 変換を考える. Faltung rule によって,  $\hat{\tilde{f}}_{\varepsilon, \eta} = \hat{K}_{\varepsilon, \eta} \hat{f}$ . このとき,  $|x| = r$ ,  $|y| = \rho$ ,  $(x, y) = r\rho \cos \varphi$  とおくと,  $dy = \rho^{n-1} d\rho d\sigma$ ,  $k(x) = \Omega(x)/|x|^n$  であるから

$$\begin{aligned} \hat{k}_{\varepsilon, \eta}(x) &= \int_{\Sigma} d\sigma \int_{\varepsilon}^{\eta} \rho^{-1} \Omega(y') e^{-2\pi i r \rho \cos \varphi} d\rho \\ &= \int_{\Sigma} \Omega(y') d\sigma \int_{\varepsilon r}^{\eta r} \frac{e^{-2\pi i \rho \cos \varphi}}{\rho} d\rho \end{aligned}$$

$g(\rho) = 1$ ,  $\rho \leq 1$ ;  $= 0$ ,  $\rho > 1$  とおいて, (1.2) を用いると

$$\hat{k}_{\varepsilon, \eta}(x) = \int_{\Sigma} \Omega(y') d\sigma \int_{\varepsilon r}^{\eta r} \frac{e^{-2\pi i \rho \cos \varphi} - g(\rho)}{\rho} d\rho$$

ここで、

$$\left| \int_{\varepsilon r}^{\eta r} \frac{e^{-2\pi i p \cos \varphi} - g(p)}{p} dp \right| \leq \log \frac{1}{|\cos \varphi|} + C$$

だから、 $\eta \rightarrow \infty$ 、次に  $\varepsilon \rightarrow 0$  のとき、 $\hat{k}_{\varepsilon, \eta}(x)$  は  $\hat{k}(x)$  に有界収束である。従って

$$\| \hat{k}_{\varepsilon, \eta}(x) \hat{f}(x) - \hat{k}(x) \hat{f}(x) \|_2 \rightarrow 0$$

故に、 $\hat{f}$  のフーリエ変換を  $\hat{K} \hat{f} = \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \lim_{\eta \rightarrow \infty} \hat{f}_{\varepsilon, \eta}$  と定義すると、

$$(1.11) \quad \hat{K} \hat{f}(x) = \hat{k}(x) \cdot \hat{f}(x)$$

が得られる。従って、作用素  $K(\hat{f})$  のフーリエ変換は

$$(1.12) \quad \hat{K}(\hat{f}) = (\alpha + \hat{k}) \cdot \hat{f}$$

である。ここで

$$(1.13) \quad \alpha + \hat{k} = \sigma(K)$$

と書いて、これを作用素  $K$  の symbol と呼ぶ。従って、

$$(1.14) \quad \hat{K}(\hat{f}) = \sigma(K) \hat{f}$$

および

$$(1.15) \quad K(\hat{f})(x) = \int \sigma(K) \hat{f} e^{2\pi i(x, y)} dy$$

を得る。(1.15) を pseudo-differential operator と呼んでゐる。

次に、特異積分作用素のクラスを二つ、次のように定める。

(I) 族  $\mathcal{A}$ .  $k(x)$  は (1.1), (1.2) を満たし、 $x \neq 0$  のとき、 $C^\infty$

に属するものとする。このような核  $k(x)$  から生成された作用素  $K$  の作る族を  $\mathcal{A}$  で表わす。

(II) 族  $\mathcal{A}_p$  ( $p > 1$ )。  $k(x)$  は (1.1), (1.2) および (1.3) を満足するものとする。このような核  $k(x)$  から生成された作用素  $K$  の作る族を  $\mathcal{A}_p$  で表わす。 (1.7) から判るように

$$(1.16) \quad \|K\|_p = |\alpha| + \left[ \int_{\Sigma} |k(x)|^p dx \right]^{\frac{1}{p}}$$

で、作用素  $K$  のノルムと定義する。

定理 1.  $\mathcal{A}$  は (I) で定義された作用素の族とする。

(i) 族  $\mathcal{A}$  は作用素の和および積について閉じている。

(ii) 作用素  $K \in \mathcal{A}$  の symbol  $\sigma(K) = \alpha + \hat{k}$  は  $x \neq 0$  で  $C^\infty$  に属する、次数 0 の同次函数である。そして、 $K, H$  が  $\mathcal{A}$  に属するとき、

$$\sigma(K+H) = \sigma(K) + \sigma(H), \quad \sigma(K \cdot H) = \sigma(K) \cdot \sigma(H).$$

(iii) 逆に  $x \neq 0$  で  $C^\infty$  に属する次数 0 の同次函数は、 $\mathcal{A}$  に属するある作用素の symbol になっている。従って、 $\mathcal{A}$  に属するある作用素が  $\mathcal{A}$  の中で逆元をもつための必要十分条件はその symbol が零点をもたないことである。

$$(iv) \quad \beta(\hat{k}) = \sum_{|\alpha| \leq n+1} \sup_{|x| \geq 1} \left| \frac{\partial^\alpha \hat{k}(x)}{\partial x^\alpha} \right|$$

ただし、

$\alpha = (\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_n)$ , 各  $\alpha_k$  は 0 または正の整数で、

$$\frac{\partial^\alpha}{\partial x^\alpha} = \frac{\partial^{\alpha_1 + \alpha_2 + \dots + \alpha_n}}{\partial x_1^{\alpha_1} \partial x_2^{\alpha_2} \dots \partial x_n^{\alpha_n}}$$

なすは

$$(1.17) \quad \sup_{|x|=1} |k(x)| \leq A \beta(\hat{k}).$$

ここに,  $A$  は  $k$  に関係しない定数である.

証明. 次の記号を用いる.

$$f \cdot g = \int f(x) \overline{g(x)} dx, \quad f * g = \int f(x-y) g(y) dy$$

$$g^\lambda(x) = \lambda^n g(\lambda x), \quad g_\lambda(x) = \begin{cases} g(x), & |x| \geq \lambda \\ 0, & |x| < \lambda \end{cases}$$

$\hat{f}$  は  $f$  の フーリエ変換, 族  $\mathcal{S}$  は急減少函数の作る族とする.

$f(x)$  が  $|x|$  だけの函数のとき,  $f$  は radial であるとい  
う.  $f_\lambda$  が radial なすは  $\hat{f}_\lambda$  もまた radial である.

$f \cdot g = 0$ ,  $\forall$  radial  $g \in \mathcal{S}$ ,  $a$  のとき,  $f$  を corradial であ  
るといふ.  $f \cdot g = \hat{f} \cdot \hat{g}$  から  $f$  が corradial なすは  
 $\hat{f}$  もまた corradial である.

$k$  が同次函数であるとき, 条件 (1.2) の成立と  $k$  が  
corradial であることは同値である. これは,  $h$  を radial

とくと,

$$k \cdot h = \int k(x) \overline{h(x)} dx = \int_0^\infty \frac{\overline{h(r|x|)}}{|x|^n} dr \int_{\Sigma} \Omega(x') d\sigma$$

から明白である.

定理の証明は、与えられた次数の同次函数の表現に基づいて  
 いる。  $g(x)$  は族  $\mathcal{S}$  に属し、corradial とする。このとき、 $g(0)$   
 $= 0$ ,

$$(1.18) \quad k(x) = \int_0^{\infty} g^{\lambda}(x) \lambda^{-n-1+r} d\lambda = \int_0^1 \{g(\lambda x) - g(0)\} \lambda^{r-1} d\lambda \\ + \int_1^{\infty} g(\lambda x) \lambda^{r-1} d\lambda$$

は、 $r > -1$  で絶対収束し、 $k(x)$  は次数  $-r$  の corradial な同  
 次函数で、 $x \neq 0$  で族  $C^{\infty}$  に属する。逆に、 $k(x)$  を次数  $-r$   
 の corradial な同次函数で、 $x \neq 0$  で  $C^{\infty}$  に属するならば、  
 $g(x) = k(x) p(|x|)$  とおくと、ただ  $p(t) \in C^{\infty}$ 、 $t=0$  お  
 よび  $\infty$  の近傍で  $0$  に等しく

$$(1.19) \quad \int_0^{\infty} \lambda^{-1} p(\lambda) d\lambda = 1$$

を満たす函数とする。この  $g(x)$  は明かに族  $\mathcal{S}$  に属し、corradial  
 である。

$$\int_0^{\infty} g^{\lambda}(x) \lambda^{-n-1+r} d\lambda = \int_0^{\infty} k(\lambda x) p(|\lambda x|) \lambda^{-1+r} d\lambda \\ = k(x) \int_0^{\infty} p(|\lambda x|) \lambda^{-1} d\lambda = k(x) \int_0^{\infty} \lambda^{-1} p(\lambda) d\lambda = k(x)$$

から判る。

$p(t)$  は radial、 $C^{\infty}$  に属し、 $p(0) = 1$ 、 $p(x) = 0$ 、 $|x| \geq 1$ 。  
 また、 $f(x)$  は  $C^{\infty}$  に属する任意の函数とする。 ~~今大抵は~~

$\lambda$  に対して,  $k_\lambda \cdot P = 0$  である。そして

$$\begin{aligned} \hat{f} \cdot \hat{k} &\equiv \int \hat{f}(x) \overline{\hat{k}(x)} dx = \lim_{\lambda \rightarrow 0} \int f(x) \overline{k_\lambda(x)} dx \\ &= \lim_{\lambda \rightarrow 0} \int [f(x) - f(0)] \overline{k_\lambda(x)} dx = \int [f(x) - f(0)P(x)] \overline{k(x)} dx \end{aligned}$$

$[f(x) - f(0)P(x)]_{x=0} = 0$  であるから, (1.17) の  $r = n$  とおいた

式を代入して

$$\begin{aligned} \hat{f} \cdot \hat{k} &= \int [f(x) - f(0)P(x)] dx \int_0^\infty \lambda^{-1} \overline{g^\lambda(x)} d\lambda \\ &= \int_0^\infty \lambda^{-1} d\lambda \int [f(x) - f(0)P(x)] \overline{g^\lambda(x)} dx \end{aligned}$$

$g^\lambda$  は corradial,  $P$  は radial であるから  $g^\lambda \cdot P = 0$ , したがって

$$\begin{aligned} \hat{g}^\lambda(x) &= \int \lambda^n g(\lambda y) e^{-2\pi i(x, y)} dy = \int g(y) e^{-2\pi i\left(\frac{x}{\lambda}, y\right)} dy \\ &= \lambda^n [\lambda^{-n} \hat{g}(\lambda^{-1}x)] = \lambda^n \hat{g}^{\lambda^{-1}}(x). \end{aligned}$$

故に,  $\lambda^{-1} = \mu$  とおいて

$$\begin{aligned} \hat{f} \cdot \hat{k} &= \int_0^\infty \lambda^{-1} d\lambda \int f(x) \overline{g^\lambda(x)} dx = \int_0^\infty d\lambda \int f(x) \overline{\hat{g}^\lambda(x)} dx \\ &= \int_0^\infty \lambda^n d\lambda \int f(x) \overline{\hat{g}^{\lambda^{-1}}(x)} dx = \int_0^\infty \mu^{-n-1} d\mu \int f(x) \overline{\hat{g}^\mu(x)} dx \\ &= \int f(x) dx \int \overline{\hat{g}^\mu(x)} \mu^{-n-1} d\mu = \hat{f} \cdot \int \hat{g}^\mu(x) \mu^{-n-1} d\mu \end{aligned}$$



ここで、積分の順序の変更は、すべて絶対収束により保証される。そして、この関係式は  $C_0^\infty$  に属する任意の函数に対して成立している。故に

$$(1.20) \quad k(x) = \int g^\lambda(x) \lambda^{-1} d\lambda$$

から

$$(1.21) \quad \hat{k}(x) = \int \hat{g}^\lambda(x) \lambda^{-n-1} d\lambda$$

が導かれる。  $g \in \mathcal{S}$  から corradial かつ  $\hat{g}$  も  $\mathcal{S}$  に属し corradial である。よって、(1.18) から判るように  $\hat{k}(x)$  は  $x \neq 0$  で  $C^\infty$  に属する、次数 0 の corradial な同次函数である。

逆に (1.21) から (1.20) が導かれることは明かであろう。これで、定理 1 の (i), (ii) および (iii) がすべて証明された。

次に (iv) を証明しよう。いま述べたことから、 $\hat{g}(y) = \hat{k}(y) p(|y|)$ 、ただし、 $p(t) \in C^\infty$ 、 $p(t) = 0$ 、 $0 \leq t < 1$ 、 $2 < t$ 、(1.19) を満足する。この  $\hat{g}$  を用いて、(1.21) によって、 $\hat{k}$  を表現し、 $g = \hat{g}'$  を用いて (1.20) によって、 $k$  を表現する。 $\wedge'$  はフーリエ逆変換を表わすものとする。このとき

$|x| = 1$  に対して、

$$|k(x)| = \left| \int_0^\infty g(\lambda x) \lambda^{-1} d\lambda \right|$$

$$= \sup |g(y)| \int_0^1 \lambda^{n-1} d\lambda + \sup |g(y)| |y|^{n+1} \int_1^\infty \lambda^{-2} d\lambda$$

次に,  $g(x) = \hat{g}'(x)$ ,  $\lambda'$  は逆  $n-1$  重根,  $x = (\xi_1, \xi_2, \dots, \xi_n)$

$$y = (\eta_1, \eta_2, \dots, \eta_n) \in \mathbb{C}^n$$

$$\xi_k^{n+1} g(x) = (2\pi i)^{-n-1} \int \left( \frac{\partial^{n+1}}{\partial \eta_k^{n+1}} \right) \hat{g}(y) e^{2\pi i(x, y)} dy$$

Hölder の不等式から  $|x|^{n+1} \leq n^{\frac{1}{2}(n-1)} \sum |\xi_i|^{n+1}$ , かつ

$$|g(x)| |x|^{n+1} \leq (2\pi)^{-n-1} \cdot n^{\frac{1}{2}(n-1)} \sum \int \left| \left( \frac{\partial^{n+1}}{\partial \eta_k^{n+1}} \right) \hat{g}(y) \right| dy$$

$$|g(x)| \leq \int |\hat{g}(y)| dy.$$

次に,  $\hat{g}(y) = \hat{k}(y) P(|y|)$ ,  $P(|y|) = 0$ ,  $|y| < 1$ ,  $2 < |y|$

故に,  $|g(x)| + |x|^{n+1} |g(\infty)| \leq A \sum_{|\alpha| \leq n+1} \sup_{|x| \geq 1} \left| \frac{\partial^\alpha}{\partial x^\alpha} \hat{k}(x) \right| = A \beta(\hat{k})$

従って,  $\sup_{|x|=1} |k(x)| \leq A \beta(\hat{k})$ .

### 文 献

- [1] A. P. Calderón - A. Zygmund: Algebras of certain singular operators, Amer. Journ. Math. 78 (1956) 310-321
- [2] A. P. Calderón - A. Zygmund: Singular integral operators and differential equations, Amer. Journ. Math. 79 (1957) 901-921
- [3] A. P. Calderón: Algebras of Singular integral operators Proc. Symposia in Pure Math., vol X. (1967) 18-55.